

# イヴァン・フョードロヴィチ・リハチョフの対馬計画（一八六〇—一九〇四）

## ワレンチン・スミルノフ

一九世紀半ば、海軍列強は太平洋北部に広がる広大な領域に注目した。最も大きな活動を示したのは英仏露米であった。軍事外交力を見せ付けられるその対象のひとつは日本であった。

帝国政府と二国間条約を締結後、日本のいくつかの特定の港が艦艇の寄港のために開港された。例えば、日露間で一八五五年二月七日に締結された下田条約により、日本政府はロシア艦艇に三つの港、すなわち、下田、箱館、長崎を開港した<sup>(1)</sup>。

その後、サンクト・ペテルブルグでは極東情勢が注意深く見守られた。一八五九年末、ロシア海軍元帥コンスタンチン・ニコラエヴィチ大公の直属の部下で、海軍大佐イヴァン・フョードロヴィチ・リハチョフは<sup>(2)</sup>、極東におけるロシアの政治に関する覚え書きを大公に提出し、その覚え書の中で、将来における日本の役割を指摘し、日露関係の根幹を概観した。リハチョフは、特に以下のように書く。

「：日本は、同国を取り巻く周辺諸国の政治において、将来最も重要な役割を果たすことが使命づけられています。地理的位置の並々ならぬ有利性、国の自然の豊かさ、おびただしい人口数の国民が持つ安寧志向と能力、これらすべての中に、輝かしい未来の確たる保証があります。我々はこの国家と直接隣接しており、それ故にこの国家の運命に精力的に関わることが不可欠であり、そのことへ我々を駆り立てるのは、自己保存本能でもあります<sup>(3)</sup>。」

リハチョフはいくつかの具体的な方策を取るよう提案した。例えば、

（既存の在箱館領事館以外に）在江戸（今日の東京）総領事館、在長崎領事館の設置である。この際、リハチョフは、東洋に駐留しているロシアの軍艦のうち最低でも一隻は各領事館付きにすることが必須であると考えた<sup>(4)</sup>。

一八六〇年初め、リハチョフは、中国周辺でのロシアの外交地位の強化のため、中国海域艦隊の編成をしよう委任され、駐北京ロシア公使、陸軍少将 N・P・イグナチエフの指揮下に入るよう命じられた<sup>(5)</sup>。

一八六〇年一月三十一日、リハチョフは蒸気客船でマルセイユを出港し、上海に到着、そこからフランスの蒸気船レミ号に乗船し箱館に降り立った。同地で四月四日ロシア領事 I・A・ゴシケーヴィチと東方情勢について話し合った<sup>(6)</sup>。その話題の中にはリハチョフが重要な戦略地点と考えていた対馬島のこともあった。

自分の日記の中でリハチョフは次のように記している。

「：ゴシケーヴィチが伝え聞いた噂によれば、英国人たちが対馬島を狙っているとのことだ。：ゴシケーヴィチは対馬島に対する私の見方には同意していない。当然のことだが、彼は、可能な範囲で行動をとった。すなわち、英国人のことを日本人たちに警告し、英国人のすべての行動と試みを *prevent* 【結局】 日本人だけで阻止するよう促した。もしあいつらがそれを実行する場合は、ゴシケーヴィチは外交的手段でやつらを阻止することができるものと考えていた。だがそんなことはほとんど期待できまい<sup>(7)</sup>。」

一八六〇年五月二一日、ロシア帝国中国海域艦隊を組織したリハチヨフは、コンスタンチン・ニコラエヴィチ大公に覚え書を送る。覚え書の中には、極東でのロシアの航海の自由の問題が論じられていた。艦隊編成は、フリゲート艦スヴェトラナ号、コルベツト艦ポサドニク号、クリッパー艦ジギット号、クリッパー艦ラズボイニク号、クリッパー艦ナエズドニク号、輸送船ヤボニエツ号、その他の艦艇である。リハチヨフは日本海が三つの海峡、すなわち、ラベルーズ海峡、津軽海峡、朝鮮海峡により、東太平洋（太平洋 スミルノフ注）より隔てられていることを指摘した。リハチヨフは「朝鮮海峡の真ん中には、警衛の衛兵のように対馬島が立っている」とし、主要な出入口と名付けた。リハチヨフは「同地では、中国への直通の航路がある。その中国で、我々は、今後、一度ならず、なんらかの役割を果たすことが運命付けられている。また、同地には、日本帝国の最重要諸地点へも直接至るルートがある。：朝鮮海峡を通ると、航海にも交易にも、極めて活気に満ちた豊かな海域に、直接出ることができなのだ」と指摘する<sup>8)</sup>。

リハチヨフの考えでは、最もロシアにとって不利なのは、太平洋への出口が「強大で敵対的な強国の手に陥る」ような事態になる場合であった。これらの出口の内、最重要地は、ロシアのために是が非でも強化しなくてはならないとリハチヨフは結論付けた。

「このことなくしては、東太平洋における我が国の海軍の影響力の拡大に向けてのすべての努力は、資金と時間と労力の無駄な浪費に終わる可能性がある」とリハチヨフは指摘している。リハチヨフは、対馬島の持つ地理的特性を挙げて次のように述べている。「この海域における我が分艦隊と艦艇にとり、休息と結集のためのこれ以上の集結場所はありません<sup>9)</sup>」。

彼は、イギリスの艦艇アクテオン号 (Acteon) とドーブ号 (Dove)

が、一八六〇年の夏の一時期を聖ウラジーミル湾で過ごした後、いち早く対馬島に行き、そこに『見事な入り江』を発見した」と記している。リハチヨフは、「イギリス人たちにも他のいかなる国に対しても、そこに基盤を固め、我が国の不利になるようなことをさせない」ためには、時を逸しないことが重要であるとみなしていた<sup>13)</sup>。この課題は、リハチヨフの意見によれば、以下の方法で解決できる。(一) 全島すべて、あるいはその一部を取得する、(二) 海岸の一部の場所を海軍根拠地設置のために譲渡を勝ち取る、(三) この国であれ他のヨーロッパ人にはこの島を閉鎖していることを確約させる<sup>14)</sup>。書簡の最後でリハチヨフは、中国情勢が収まり次第、分艦隊の一隻を測量・海図作成のために対馬島に派遣し、できるだけ長く同地で任務を続けさせることを自らの権利とみなすと記している<sup>15)</sup>。

二ヵ月後、コンスタンチン・ニコラエヴィチ大公は、対馬島に関するリハチヨフの報告書を皇帝アレクサンドル二世に上申し、ただちに一八六〇年七月二六日、リハチヨフに対して返書がもたらされた。それは以下の通りである。

「：もし我々が、ヴィラフランカ【ニースの東方約六km】に我々が創設したと同じような施設を対馬島に設置する権利を取得することに成功するならば、それはきわめて満足すべき結果と言えよう、と皇帝陛下はお考えになっておられる。日本帝国の幕藩体制【Федеральное устройство】は、この件において、もしかしたら助けになる可能性があるかもしれない。その理由は、貴下が、中央政府との交渉なしに、現地の藩主、あるいは、権力者との合意に基づく取引に限定することが出来るからである。貴下の交渉は、決して外交的かたちをとるべきではなく、何よりもまず我々の分艦隊と土地の権力者との私的取引のかたちで行われるべきである。：。皇帝陛下は貴下の豊かな経験と叡智に大いに期待なさっております。

だ。<sup>16)</sup>

リハチヨフが大公の書簡を受け取ったのは、ようやく、一八六〇年一月半ばであった。<sup>17)</sup>一八六一年一月、上海でリハチヨフはイギリスの艦長ジョン・ウォードに会う。砲二六門艦載フリゲート艦アクテオン号ばかりではなく、東洋海賊を測量する複数の小型艦艇を指揮していた。この結果、リハチヨフはウォードから対馬海峡の地図のゲラ刷りと二枚の地図、チュサン【舟山】島と聖ウラジミール湾のもの、そして、最新年のイギリスの海測の詳細な結果と中国沿岸と対馬島での彼らの複数の測量図を知見することになる。<sup>18)</sup>

リハチヨフはイギリス人を出し抜くことに決めた。一八六一年一月二八日、リハチヨフは長崎に滞在していた駐箱館ロシア領事I・A・ゴシケーヴィチに、なぜ同氏が江戸にいななければならないか（つまり、イギリス外交官らの日本政権に対する働きかけを知り、さらに、なによりも、対馬の件でロシア艦隊の努力を支えようとする必要があること）を説明した。<sup>19)</sup>

一八六一年二月二（一四）日、リハチヨフはコルベット艦ボサドニク号艦長N・A・ビリリヨフ海軍中佐に「極秘」と印の押された命令を下した。その中には、駐箱館領事・I・A・ゴシケーヴィチを箱館に送った後、測量のため、朝鮮海峡を対馬島に向け航行するよう命じていた。同様に、艦艇の修理を行うに不可欠な「すばらしく、完璧に閉じた入り江」にいる間に、「朝鮮海峡両翼」の測量、同地の情報すべてを収集するよう、命じた。命令書には、イギリス人が作成した、島の西岸の入り江の未完成の地図の写しが添えられていた。<sup>21)</sup>

一八六一年三月一日、コルベット艦ボサドニク号は対馬島に到着し、オサキ【尾崎】村岸に投錨する。次の日、ビリリヨフは第二位の役人トダ・ゴオキオ【戸惣右衛門】か。御用人助勤、大目付、三月五日（和暦

二月八日）まで問情使<sup>22)</sup>に次のような要求をした。

一、コルベット艦修理の全期間、ヨーロッパ人に対して開かれた港における協定に準じたすべてを行使する。すなわち、以下の通り。

二、本官の要求を満たすため、藩の役人一名を本官付きに任命すること。  
三、作業小屋、兵舎、病院建設用地、あるいは、病院に当てるための寺院を陸岸に提供すること。

四、新鮮な食料、および、購入が必要なすべてを受け取ること。

五、木材、その他、資材、労働者の雇用を提供すること。

六、入り江の両側、島の内陸一里の範囲は、立ち入り禁止にすること。

七、測量調査中妨害をしない。

八、ボートの賃借、購入をすること。

九、藩当局との相互訪問と表敬。

十、本官が藩主を訪問し、また、その返礼を受け取ること。

十一、本官が望む相手に望む品を贈ることができること。

十二、長崎との郵便連絡が取れるようにすること。<sup>22)</sup>

ロシア人たちは、コルベット艦ボサドニク号から大型ランチ【Гапка】<sup>23)</sup>と数艘の小型艇を出し、周辺の入り江の測量・海図作成を始めたが、このことが対馬の役人たちの不安感呼び起こした。三月五日戸田がビリリヨフに長崎に移動することはできないかと聞いたが、ロシア海軍士官ビリリヨフは、外国からの客にそのようなことを言うのは無礼だと答えた。三月八日戸田の代わりにヴォブラ・ノリノスケ【大浦教之助】戸田惣右衛門の後任で問情使になるも和暦二月二〇日辞す<sup>24)</sup>（七十歳の老人）が任命され、同行者と共にコルベット艦にやって来て、同じく対馬を退去するようビリリヨフに求めた。その老人が不用意に扇子で机を叩き始めた時「酒肴を出して其労を謝す、大浦云、我輩は酒肴の饗を請くる為め来たりしにあらすとて、テーブルをしきりた、けは

酒肴散乱す」(幕末外国関係文書卷之四九―四七)とある)、ビリリヨフは立ち上がり、「今後、もしおまえが、皇帝陛下の艦艇でそのような不埒な態度をとるようなことがあれば、みせしめに、罰してやる」と言った。<sup>(23)</sup>それを聞いた四人の役人は全員ビリリヨフの前に跪いて救しを乞うた。その後の日々、日本人たちは、ロシアの小型艦艇が入り江を巡ることや海軍軍人の上陸を妨げた。三月二十六日、対馬公の次席役人ジェオニスケ【朝岡讓之助。宗家問情使、朝鮮方頭役】が、島を退去するよう、再びビリリヨフに求めた。しかしながら、この日、入り江には、リハチヨフの乗艦するクリッパー艦ナエズドニク号が入港し、このため、日本人たちは、目に見えて、いっそう譲歩するようになった。<sup>(24)</sup>

以前リハチヨフは江戸にしばらく逗留していたことがあったが、その時、一八六一年三月一日、クリッパー艦ナエズドニク号上でゴシケーヴィイチに出会った。艦隊司令官【リハチヨフ】が、その日記の中で記しているところによれば、ゴシケーヴィイチは「すでに日本人たちに対馬島のことをたつぷり話す機会があり、箱館では奉行に地図を見せたが、対馬島のことに関しては、何の権利も持っていないければ、誰からも全権を委任されていなかった」<sup>(25)</sup>。明らかにその理由で、五月二十七日にビリリヨフとコルベット艦ボサドニク号の九人の士官は対馬島に滞在したという情報を、「この秘密の保持が必要と上部が認めている間は」口外しないようにという念書をリハチヨフに渡した。<sup>(26)</sup>その後、同様の念書は分艦隊の他の艦艇の士官たちも渡した。<sup>(27)</sup>

ビリリヨフはリハチヨフに、日本人の話では、一八五九年のある時、イギリスの軍艦アクテオン号が日本の役人たちに大粒散弾銃を浴びせた結果、二名ないしは三名が死傷したと語った。三月二十七日リハチヨフとビリリヨフは小型艇で入り江を廻ったが、リハチヨフは、ロシア海軍根拠地として芋崎【この地名は「インモ・サキ」と書かれている。以

下同様】を選んだことに賛成し、その後、ナエズドニク号で出航した。<sup>(28)</sup>ボサドニク号艦長の行動をリハチヨフは次のように評価している。

「ビリリヨフの対処はきわめてまずい。彼は一ヶ月の間何ら期待された成果を挙げていない。あまりにも慎重で、日本人側のあらゆる難癖にも翻弄され、さまざまな圧力に屈してばかりしている。日本人たちとうまくやっていく能力はあるかもしれないが、今後も同じように事が進むのであれば、決定的なこととは何一つできないであろうとことを危惧する。」<sup>(29)</sup>

三月二十八日、ビリリヨフは、日本人たちによる妨害行為の件についてジェオニスケ【朝岡讓之助】と激しくやりあったが、日本の役人の一人が艦の当直を押しした際、役人全員が消火ポンプからの水を浴びせかけられた。三月二十九日、コルベット艦ボサドニク号がコブノコシ村【小船越】の近くに停泊していた時に、またしても日本の役人たちは大型ランチの消火ポンプの水をかぶることになった。それ以後日本の小船は姿を見せなくなった。

三月二十九日、ビリリヨフは海岸で建設工事に着手した。日本人たちはやって来て手助けをした。一時三〇分に作業は終了したが、その時間には棒を手にした大勢の農民が集まってきた。しかし彼らは、ボサドニク号の正午の号砲が鳴らされた途端、役人たちと一緒に、あとも振り返らず一目散に四散した。リハチヨフに当たった秘密報告書の中でビリリヨフは次のように伝えている。

「私は芋崎を確保したいとは思っていましたが、日本人側から私にそのような提案があったというかたちにしたと考えていました。そして極めて早い時期にそれを達成することができました」<sup>(30)</sup>

四月二日、新しい第二位の役人平田茂左衛門【宗家年寄、宗家勘定奉行、大目付助勤兼任。和暦三月七日より問情使。実際には「ヒラタ」で

はなく「ヒロタ・モザエモン」と書かれている」とミツヤマ・シオドイゾオ【満山俊蔵、筆談役】がやってきて、芋崎の選定問題はその後で決着し、ビリリョフの要求は、牛の提供以外はすべて受け入れられた。午後四時、コルベツト艦は芋崎に投錨した。

四月三日、海岸には掲揚台が建てられ、ロシア旗が掲揚された。ビリリョフは日本の人夫たちの助けを借り、ロシア式蒸し風呂、台所、納屋、波止場の建設を初め、野菜畑、良質の陶土で煉瓦を造ることを計画した。<sup>(31)</sup> 四月一〇日、沿海州にいたりハチョフは、I・A・ゴシケーヴィチから書簡を受け取った。そこには、五月末、江戸を立出して、箱館に向かったとの知らせが書かれていた。

リハチョフは日記の中で、「何も為さず、ビリリョフの対馬滞在の知らせを待つこともなく」領事が江戸を発つたと記している。<sup>(32)</sup>

四月一日、ビリリョフは満山と平田両役人と、対馬に対する将来にわたるロシアの保護について話し合い、その後、彼らは藩主の元に向かった。四月一五日、満山と平田は二人の藩の役人を伴って帰って来た。二人の役人は、鶏、卵、野菜、魚、エビなどの贈り物をビリリョフに届けた。彼らはビリリョフに仁位孫一郎（対馬と釜山の知事）【実際には「ニイマゴ・イツィロ」と書かれている】との個人的会談を要請した。返礼としてポサドニク号艦長は藩主に拳銃、立派な遠眼鏡、シャンペン六本、リキユール四本および砂糖数キロを贈った。

明くる四月一六日、クリッパー艦ナエズドニク号とリハチョフの乗艦したフリゲート艦スヴェトラナ号が入り江に到着した。ビリリョフと共に彼は高い丘の上から島の東部を観察した。四月一七日、皇帝アレクサンドル二世の誕生日の祈祷と祝砲の後、ビリリョフのもとに仁位孫一郎が正装でやって来た（年齢は五十五歳、極めて聡明で意味深長な顔をした際限なきまでに礼儀正しい人物）。彼は、島へのロシア海軍軍人の

滞在に関して、牛の提供と藩主との会見以外のすべての条件に応じた。<sup>(33)</sup>

四月一八日リハチョフは複数の艦艇とともに島を去った。同日、リハチョフは自己の日記に「：総じて、ビリリョフには、優れた面がある。そのことに私は喜んで同意する。もっともビリリョフに対し私は反感にも似た先入観を拭えないではいるのだが：」と記している。<sup>(34)</sup>

四月二二日（日本海ポシエツト湾のノヴゴロド港に逗留していた時、リハチョフは、コンスタンチン・ニコラエヴィチ大公に宛てた書簡の中で次のように記している。

「：私は現在では、対馬島をまったく別の目で見ております。ピョートル大帝湾の諸港は、航行のために、カムチャツカのペトロパヴロフスキー港に比しても、年間の【航行可能】時間がおそらく変わらないであろうと確信した今、我が艦隊発展の礎は対馬にあると思っております。：いずれにせよ、この対馬問題をさらに押し進めるのか、あるいは後戻りするかを今こそ緊急に決定すべきです。：」<sup>(35)</sup>

四月二二日付の別の書簡の中でリハチョフは、対馬島に海軍根拠地を置くことの利点に付き、次のように伝えている。「：芋崎岬はあらゆる点から見て、全世界の海軍力を収容しうるほどの広大な湾で、僅かな力でもって、支配的地位を確保するのに最も優位な場所です。」<sup>(36)</sup>

軍務報告者に添付された覚え書の中でリハチョフは、対馬島の地所の確保を「法の観点から」保証するためには、日本政府との直接接触が不可欠であると指摘し、次のように書いている。「：中央政府との交渉に入るのが遅くなればなるほど、その同意を得ることが困難となるであります。：信任状を与えられた大臣（公使のこと。ヴァレンチン・スミルノフ注）の派遣の必要を私が確信する理由はまさにそこにあります。：」<sup>(37)</sup>

とはいえ、これはこれとして、話を島での出来事に戻すことにしよう。

四月一八日、リハチヨフが島を去った後、ビリリヨフは仁位孫一郎と会見するためにクロセ村【黒瀬】に出掛けた。長時間にわたる交渉の後、ビリリヨフは、もし自分が満足できるような書簡が得られれば藩主と会見しないこともありうると言明している。書簡の中でそれに該当する部分は以下の通りである。

「藩主は、貴公たちが現在占めている場所を今後当地にやって来る可能性のあるロシア艦艇の使用に供し、貴公たちが作った構築物は保存し、他の国の艦艇に対しては同地の借用を許可しないことに同意している。そのことに対する礼に関して言えば、我々にとつて最も良いのは銃砲で、それに対する許可を江戸から得られれば、藩主は大いに喜んで受け取るであらう。」<sup>(38)</sup>

四月二一日、大物の役人（藩で五番目の人物）がやって来て【吉川内記か。居込興頭】、ビリリヨフに彼の知り合いの長崎奉行・岡部駿河守【長常】からの書簡を渡した。しかし、ビリリヨフは、書簡を読む権利は自分にはないので書簡を艦隊司令長官に送ると言明し、日本の役人たちががっかりさせた。役人の一人がビリリヨフに、この書簡は藩主が江戸を介して受け取ったもので、ロシア人の側の危険性を警告する内容のものであることを伝えた。ビリリヨフは「江戸は我々の側に立っていないこと、岡部の使者が藩主の元へ派遣されたことは事の成功に若干の障害となる」<sup>(39)</sup>ことを理解していた。事実、岡部の訪問により【実際には前文も含めて宗家表目付・小茂田貫介が長崎奉行・岡部駿河守の書簡を持って帰着】状況は種々変わった。仁位孫一郎の依頼で開かれたロシア語学校に生徒たちが来なくなり、学校は閉鎖せざるを得なくなったり、人夫たちも遅刻が目立ち始めた等である。

四月二三日、パスハ（復活大祭）だったので、これを機会に、ポサドニク号に大名からの贈り物をたくさん積んで日本船がやってきた。同様

に、仁位孫一郎からの書簡を持ってきた【この日、仁位の書簡と「被成下物」を持ち平田たちが訪れたのは、「パスハ」だったからではなく、単に偶然だったらしく、士官たちが白服の礼装であったことに逆に驚いている（幕末外国関係文書巻之五二一六九）】。ビリリヨフは書簡の内容を理解するのに四日間かかった。家老【Joephannou仁位孫一郎】は、ビリリヨフの健康を願うとともに、江戸からの許可が下り次第、藩主に大砲を贈ってくれるよう頼んだ。四月二八日、コルベット艦に平田がやって来てその書簡を読みだした時、ビリリヨフはその手紙の中の虚偽を指摘し、もし約束された書簡を受け取れないのであるならば、自ら公邸に赴く、と藩主に伝えるよう言って、平田を藩主の元に帰した。五月三日平田が戻ってきたが、書簡は持って来なかった。

五月九日、日本人たちは三列のくいで瀬戸を封鎖したので、水路調査を終えて海から帰って来たロシアの大型ランチは瀬戸に入ることが出来なかった。F・A・ゲルケン海軍大尉は村から役人を呼ぶよう命じたが、斧を手に集まった群衆（二〇〇人）から大型ランチに向けて石が飛んできた。引き続き日本人たちは大型ランチに殺到したが、空に向けて発射されたピストルでもって止められた。四人の水兵が銃を持って陸に駆け上がったところ、群衆は一斉に逃げ出したが、日本人を二名捕まえることが出来た。暗くなつてゲルケンを狙って二度銃が撃たれた。

翌日ビリリヨフは、オブノコシ【大船越】村へ大型ランチで上陸部隊を派遣し（先任士官セルコフ大尉を先頭に二〇名）、二名の役人と一名の兵士を銃もるとも捕捉した（日本式の火縄銃二五丁と日本刀九本）。その後村に戻った住民たちは、銃を撃ったのは役人たちで、彼らが石を投げるよう強制したと言った。セルコフの要求に応じて住民たちは、七頭の牛を売るためにつれてきて、その後、瀬戸に設けられた障害も壊した。大型ランチがコルベット艦に戻ってきた時、ビリリヨフは、服従的態

度になった役人たちを呼び出し牛の代金を支払い、一刻も早く仁位孫一郎がやって来るよう要求した。五月二日、ビリリョフのもとへ、その第一日本役人トダ・ゴオキオ【戸田惣右衛門 大目付、問情使】とトクツイ・トコツイロ【田口徳一郎 眞文方、筆談役】がやって来た。戸田を相手にビリリョフはすべての問題を迅速に解決し、役人たちを帰したが、武器を返却したのは翌日になってからであった。

五月一六日と一七日、ビリリョフは仁位孫一郎と新たに会見をした。仁位孫一郎は、ロシア人が海軍根拠地を確保することに藩主が同意していることを伝え、この件について書簡を送付することを約束した。夕刻、戸田が質の悪い紙に書かれた書簡を持って来たが、内容はまったく別のものであった。

一八六一年五月一八日、対馬島にコルベット艦カレヴァラ号が到着、いろいろな荷物と郵便物を運んできた。二〇日になってボサドニク号がいた入りにJ・ウォードの小艦隊、砲二六門艦載のフリゲート艦アクテオン号 (Acteon)、砲艦ドーヴ号 (Dove) とレーヴェン号 (Leven) がやって来た。

同日、五月二〇日にビリリョフは対馬当局から公式書簡を受け取った。日本人たちはビリリョフに、この書簡の内容は、ロシア人が対馬に常設海軍根拠地を設置することとそれに伴う土地譲与、および島にロシア艦艇が不在の時はずべての構築物を保存することに対する許可と同意であると断言した。同日ビリリョフは同伴に付き、リハチョフ宛に報告書を認め、海軍根拠地敷地の境界を記した地図を添えた。だが、ビリリョフは書簡をリハチョフに送ろうとはしなかった。「書簡の内容が本当であるかどうかの確信」がない、というのは「日本人たちは信じ難い……どんな人間も日本人より上手に嘘をつく能力はない」というのだ。彼は、もし提示された文書の中に「虚偽があった」場合は、新しい書簡を日本人

に要求するつもりだと報告した<sup>(43)</sup>。それと同時にビリリョフは、イギリス艦艇の到来は日本人たちを心底驚愕させたが、自分がいることで彼らを落ち着かせたと伝えている。「日本人たちは、今や子供のよう私にまとわりついてはいるが、私は際限なきまでに礼儀正しく行動するように、と彼らを諭している」とビリリョフは記している<sup>(44)</sup>。この書簡を彼は、五月二一日に対馬を後にしたコルベット艦カレヴァラ号に託した。

イギリスの士官たちと知り合った際のことについて、ビリリョフは、ウォードにとつては自分との出会いはそれほど愉快なものではなかったと記している。だが、にもかかわらず二人は十分意気投合をした。ある時、ウォードが海岸を散歩中に四人の日本人に襲われたが、彼の部下たちが叫び声を聞きつけて直ちに駆けつけ、彼自身はすばやく日本人一人の服をつかんだ。その際、服が破れ、日本人たちは逃げたが、刀が戦利品として残された。この後ウォードは、対馬にロシア人がいることをイギリス公使R・オールコックに伝えなければ<sup>(45)</sup>、とビリリョフにほめかし、出航を急いだ。

イギリス人たちは薪を要求していたが、日本人たちは彼らに激しい憎しみを抱いていたため、様々な口実を設けて薪を与えなかった。そこでビリリョフはイギリス艦艇について薪を運ぶ助けをし、彼らに牛三頭と二個の檣の丸太の切り株を渡したが、ウォードは「大喜びでそれらを受け取った」<sup>(46)</sup>。五月二四日、イギリス艦艇は対馬を離れた。

一八六一年五月二六日リハチョフは、イギリス人が対馬に現れたことを知り、「：対馬の件は……危機に近づいている」と日記に書き留めていた<sup>(47)</sup>。そうこうするうちに、対馬島に蒸気船「クアンコ・マル」【觀光丸】で長崎副奉行【Vile-Tyberharop】ナガモチ・カジロ【永持亨次郎、長崎奉行支配組頭】がやって来て、まずビリリョフを尋問することを試みた。しかしながら、ロシア士官はそれが礼儀正しくないことを彼に納得させ、

日本人の助けを借りて作られた炊事場、鍛冶場、納屋、診療所などの陸上施設、そしてコルベット艦ボサドニク号を見せた後に、一刻も早く、対馬藩主との面会の場を設けるよう求め、「全世界の安寧のために」水路測量を行うことが不可欠であることを話した。永持が病気になった時、直ちにビリリョフは彼のもとに医師を派遣し、その後永持は六月三日に全快した。<sup>(48)</sup>

同日、クリッパー艦ラズボイニク号が到着し、ビリリョフは同艦で、リハチョフ宛の秘密報告書、日本側の書簡とそれを翻訳したものを各一通を発送した。日本人たちから受け取った文書についてビリリョフは次のように伝えている。

「：仁位孫一郎の書簡は、念入りに翻訳しましたが、私が望んだとはまったく違うことに書かれていることが判明しました。しかしながら私は貴職に送付することに致します：日本人たちが力説するところによれば、これは、ロシア人による庇護を依頼するものであり、当地に常設海軍根拠地を置くことの提案であり、ロシア人のみと関係を持ちたいという希望でもあることです。<sup>(49)</sup>」更にビリリョフは次のように記している。

「：日本人は、イギリス人が去った後おそろしく親切かつ気配りに満ちた態度をとるようになりましたが、ただ一つ私が希望する藩主訪問の件に関しては、役人たちはその返答を先延ばしにするのに懸命でした。<sup>(50)</sup>」

一八六一年六月の始めに、永持亨次郎を応接から退けた高位の役人小栗豊後守が江戸からやって来た。<sup>(51)</sup>ビリリョフは小栗と二度（六月五日と一日）会見したが、その結果理解したことは、この人物は「確かに愚かな人間ではないが、その代わりに、日本のすべてと同様に、言うことは信用できず狡猾である」というものであった。<sup>(52)</sup>六月一三日の会見の際小栗はビリリョフに、六月二〇日に藩主がロシア士官を受け入れるよう努力すると伝えた。同日夕刻対馬にクリッパー艦ガイダマーク号が到着

した（艦長はA・A・ベシユチュロフ）。ビリリョフは、自らの藩主訪問を然るべきやり方で保証し、府中にロシア国旗を翻すために、クリッパー艦の出航を差し止めた。

六月一六日、小栗を頭に帝国の役人たちは蒸気船観光丸で長崎に向かった。当然のことながら、対馬におけるロシア海軍軍人の活動についての詳細な情報は、じきに日本政府に報告された。

六月二〇日、二隻のロシア艦が府中に向けて出発し、府中で彼をむかえたのは家老・仁位孫一郎であった。後にビリリョフはリハチョフに次のように伝えている。「：日本人たちは市中で私のために良い藩主邸を用意してくれ、私はその日のうちにそこへクリッパー艦から移動しました。この家を日本人は完全に私の自由にさせてくれました。我々ロシア人たちが、府中に測量やその他の用件で行ったとしても、家はいつもそのロシア人の管理下に置かれるよう、私は条件を付けたのです。家は、良い場所にあり、波止場「へも」近くです。<sup>(53)</sup>」

六月二一日、籠に乗ったビリリョフとベシユチュロフ、両艦の士官たち（彼らは馬に乗って移動）は、ロシア国旗を掲げ、歌を歌いながら先頭に立って進む護衛兵二個小隊（四〇人）に守られ、藩邸に到着した。そこでは槍、矢、火縄銃で武装した警備兵が整列していた。訪問の様子についてビリリョフはリハチョフに次のように伝えている。

「：家の中に入ると我々はあまり大きくない脇の部屋に通されましたが、そこからは、すぐに、我々に同行していた役人たちが全員座しているのに気が付きました。その後、我々は大きな広間に通されました。その奥には藩主が肘掛け椅子に座っており、両脇に大役人たちが活人画の集まりのように、頭をたれて立っていました。すべてが、特に藩主は蠟人形のようにびくとも動きませんでした。我々が近づくと彼は立ち上がりました。我々は彼と握手した後、彼の真向かいにある小さな腰掛け

に座ったのです。

仁位孫一郎、戸田、平田は我々の周りに立っていました。藩主は改めて腰を下ろし、別れの時まで再び微動だにせず、おそらく、歓迎の挨拶であろうと思われる何かを自分の第一役人に囁いたのみで、それ以外は藩主の代わりに役人たちが、あたかも藩主の目を見て返答を推測したかのごとく答えたのでした。この独特な訪問は十分足らずで終わり、藩主は別れ際に我々と再び握手をし、お付きの者を従え、すぐさまその屋敷を出しました<sup>(54)</sup>。

一八六一年六月二二日、ピリリョフはリハチョフに宛てた秘密報告書の中で、確かに、この訪問は「目に見える成果はもたらしませんでしたが、間違いなく将来に向かう大きな第一歩です。日本で最初に何かするというのは難しいのです。しかし日本人はいったん決意したら相当なる勇気をもって行動し、ヨーロッパの…に喜んで従っています」と伝えて<sup>(55)</sup>いる。彼はまた、藩主の側近の役人が、藩主は実際のことは何も知らず、すべては第一大臣【Генералъ Министръ 家老か】が決定している、と記している。ピリリョフは更なる交渉のために藩主のポサドニク号への来訪について彼と合意をしている。報告書の最後でピリリョフは次のように記している。

「我々と日本人との関係は今までと同様に極めて友好的で、我々の艦艇は島のあらゆる箇所で、歓迎され、もてなされ、受け入れられています。ゲルケン海軍大尉が夜営をする際にはいつも最良の家が宛われ、良い食事が提供されていました。もちろん代金は支払ってではありません<sup>(56)</sup>が…。」

六月二二日付の報告書の中で、ピリリョフは、対馬における現在までの状況について、次のような評価を下している。

「…常設の海軍根拠地をここに確保する権利は簡単に得られるものと

私は期待しています。しかし、更にそれ以上の何かを願っても悪くないのではないのでしょうか？ここでは私を取り巻く環境は十分良い。私はここでは信用されていますし、少しは愛されているように思います」「太字と傍線は筆者ヴァレンチン・スミルノフ」：今や事は良い状態にあると私には思えますし、私が以前心配していたこと、すなわち、日本人がイギリス人に対して抗議の声を上げるのではないかとの危惧はもはや想定できないものと思われ<sup>(57)</sup>ます。」

ピリリョフのこの報告書と書簡をリハチョフは、六月二七日にクリツパー艦ガイダマーク号から受け取った。この時期リハチョフは、沿海州総督・海軍少将P・V・カザケーヴィチの配下にあつたからである。リハチョフは日記の中で「…ピリリョフは舞い上がっている【原文は“High spirits”】ようだ。だが、いつまで長続きするものやら」と記している<sup>(58)</sup>。

一八六一年の七月から八月の前半、ピリリョフは「専ら島の測量に従事」し、さらに、水路調査のため、コルベット艦に乗り、自ら一週間海上に出たりしていた。その結果、対馬の測量は終了し、島の地図が作成された。また、海軍根拠地のための建物の建設も完了した。八月一七日、ピリリョフはリハチョフに「…我々と日本人との関係は極めて友好的です。我々は、ここでは親切と歓待以外に見るものは何もありません」<sup>(59)</sup>と伝えている。

一八六一年七月二七日、ゴシケーヴィチはリハチョフに秘密の書簡を送り、その中で彼は、ロシア軍艦が破損箇所の修理に着手しないまま対馬に長期間滞在していることを知った日本政府は、同艦を近くの港に移動させるよう提言したと伝えている。ゴシケーヴィチは、ロシア人の意図に他意はないことを日本人が疑うことがないよう、彼らが頼んでいるようにすべきであると考えていた<sup>(60)</sup>。

おそらく、リハチヨフが対馬島にクリッパー艦オプリーチニク号を派遣したのは、この書簡を受け取る前と思われる。同艦艦長海軍少佐P・A・セリヴァノフは艦隊司令長官の秘密書簡をビリリヨフに渡している。この書簡の中でリハチヨフは、対馬に関しての主たる諸目的を再度確認している。

「一、我々にとって何よりも不可欠なことは、対馬からヨーロッパ人たちを退去させることである。二、出来るだけ我々の根拠地を強化すること：我々の元にある場所を購入し、現存の建物を拡張するか、新しいものを建設することが望ましいと思われる。」<sup>61</sup>

リハチヨフは、対馬当局から別の行動を引き出すことが必要だと考えているが、その行動について「江戸および大君の政府に知らせる必要はまったくない。同伴は、すべて、藩主とその政府の私的な事柄で、大君が介入すべき余地は何もないと思われる」とみなしていた。<sup>62</sup>

リハチヨフは、対馬の人たちに、「ロシア政府に対する直接的で非常に親しい関係は、自分たちにとって、まさに利益以外の何物をも引き出さなすものではない。」ことを納得させることが望ましいと見なしていた。<sup>63</sup>リハチヨフはまた、クリッパー艦オプリーチニク号をビリリヨフのもとに向かわせた。水路測量作業の遂行および彼への可能な限りの協力のためである。リハチヨフは、ビリリヨフが一時的に島を後にし、今後の行動について私的に相談するため、箱館にいる自分のもとに、九月一日頃、到着できるよう求めた。リハチヨフは書簡を締め括るにあたって以下のことを再度繰り返し返している。

「：貴下もご承知のように、我が国政府の要望は、簡単に言うところ、出来るだけ確とした足場を島に築くことである。だが、その際、そのことが決して日本政府との友好的な関係の断絶、もしくは、冷却に繋がらないようにすべきであるとも求めている。」<sup>64</sup>

八月二日、ニコラエフスク・ナ・アムーレでカザケーヴィイチは、リハチヨフが「海軍少将」の身分を受けたことを祝った。<sup>65</sup>それと同時にリハチヨフは海軍省長官N・K・クラツベからペテルブルグへの帰還許可を受けた。しかしながら彼は極東にそのまま残った。その理由は、「日本（つまり、対馬）における我々の一件がいったいどこで止まってしまったのか」を知らなかったからであり、またロシアへは、後日上海経由で帰る、との決断をしたからである。<sup>66</sup>

これとほぼ同じ頃にイギリス公使R・オールコックは日本の外国奉行と長時間の会見を行い、その後、イギリス海軍提督J・ホープ<sup>67</sup>と公使館書記官L・オリファント<sup>68</sup>がコルベット艦エンカウンターで砲艦リングドローヴ(Ringdove)に護衛され対馬に向かった。日本人たちはイギリス人の島への上陸に好意的でなかったが、オリファントは大胆、かつ、執拗さを発揮し、土地の役人からロシア軍艦が対馬にいることを無理やり聞き出した。長い間の搜索の後、ボサドニク号がイギリス人たちに発見されたのは八月十五日であった。ビリリヨフは、イギリス海軍提督に受け入れられ、イギリス人たちに建物や施設を見せたが、J・ホープ<sup>69</sup>の書簡に対する返書の中で、島を占領せよとの命令は何ら受けていないと伝えている。<sup>70</sup>そのため、ホープは北に向かった。ロシアの提督を探すためである。<sup>71</sup>

海軍大尉F・A・ゲルケンを乗せ対馬に到着したクリッパー艦オプリーチニク号は、ビリリヨフにより壱岐島の測量・海図作成に派遣され、一八六一年八月二三日から九月一日まで測量に従事した。島の役人はロシア海軍軍人に親切で、クリッパー艦に薪を供給した。一八六一年九月二日、対馬に戻った後、【オプリーチニク号艦長の】セリヴァノフはビリリヨフに、近隣の島々を含めた壱岐島の地図、(壱岐島の西側にある)入り江ゴジ【加志之浦】の地図、および壱岐島の地図に添えられた何枚かの

絵図を提出した。<sup>(72)</sup>

一八六一年九月六(一八)日、リハチヨフは聖ウラジーミル湾に到着  
同地で、八月二四―二五日に同地に滞在したホープの書簡を見つけた。<sup>(73)</sup>

ホープの書簡は、ロシア人海軍軍人による対馬島岸の地所の確保に対す  
る抗議が書かれていた。ホープは、箱館到着後、書簡の写しをゴシケー  
ヴィチ領事に手渡し、対馬での出来事を箱館奉行M・淡路守(村垣淡路  
守)に告げた。<sup>(74)</sup>

状況分析をする中でリハチヨフは、もしゴシケーヴィチが江戸に残つ  
て同地でイギリス人の「すべての欺瞞行為と振る舞い」を注視してい  
たら、対馬事案の挫折はなかったであろう。「今や残されているのは、  
この重要な事案をおそらくイギリス人どもの益のために犠牲にすること  
のみである。イギリス人どもの側からの轟々の大叫声とがんがんの抗議  
の声がペテルブルグで上げられることは覚悟しなければならぬ。我が  
国の外務省は、当然、何としても事を採み消すことを急ぐであろう」  
と、リハチヨフは日記の中でこのように記している。<sup>(75)</sup>

彼の考えるところでは、もし行動許可を一八六〇年の一二月ではなく  
六月に受けていたならば、「中国での戦争の轟きに合わせて」<sup>(76)</sup>、何かなし  
得ることができたはずである。のみならず、対馬事案の良い解決を妨げ  
たのは、外務省側からのゴシケーヴィチあるいは彼(リハチヨフ)に対  
する訓令と全権付与がなかったからであり、もしそれがあれば冬に江戸  
で行動することが出来たであろう、とする。リハチヨフの考えるところ  
では、協力が足りなかったとしてゴシケーヴィチを責めることはできな  
い、その理由は、第一に、一八六一年の九月の段階でゴシケーヴィチは  
ペテルブルグから一言も何も聞いていない、第二に、ゴシケーヴィチは  
「このような場合に要求される政治的役割を果たすだけの能力はまった  
くない」人間だったからである。<sup>(77)</sup>

その一方でリハチヨフは、もしゴシケーヴィチが幾らかの間でも江戸  
に留まって、そして、もし彼にこの事案の動向を注意深く追う気持と能  
力があつたら、対馬問題に対する日本人の見解を十分明らかにすること  
ができたであろう、としている。最後にリハチヨフは間違いの一つとし  
て、ペテルブルグの上層部が、対馬に関して、絶えざる監視を要求した  
命令を自分に出しておきながら、その後全艦隊と共にカザケーヴィチの  
直接の司令下に入るよう指示したことを指摘している。

「私は、ピリリヨフの能力と機敏さのみを支えとして、成功への極め  
て僅かな希望を持って事に当たったが、もしかしたら、自分の幸運と万  
に一つの可能性に期待しすぎたのかもしれない。何もすべきではなかつ  
た。ペテルブルグへの書簡には次のように記すことにする。私に指示さ  
れたやり方では何も成し得ない。もし可能であるのなら、私が最初に提  
案したように、外交交渉というやり方で行動すべきである。以上のこと  
を九月一四日に(一週間後にあたる)記すこととしたが、未だ冷静な状  
態になれないでいる。もしかしたら私は自分の将来をすべて失うことに  
なるだろう。だが、このことが私にとっていかに高く付くものとなるう  
が、また、ロシアにとつていかに重大なことであろうが、事を収めるべ  
きである、と私は考えている。…」<sup>(78)</sup>このようにリハチヨフは自分の日記  
に腹立たしげに書いている。

九月九日、リハチヨフが既に箱館にいる時、ある新聞には、ロシア軍  
人の対馬島滞在に関し、いい加減な記事が掲載され、一方、民衆の間  
には、「あたかも、対馬に対するロシア人の攻撃が行われ、その際、三〇  
〇―四〇〇門もの大砲を対馬公から奪い取ったという、対馬公の報告文  
書が出された、かのような…」<sup>(79)</sup>馬鹿げた文書が出回ったことが明らか  
になった。

ゴシケーヴィチはリハチヨフに、日本人はずっと前からロシア艦艇を

対馬島から退去させるよう懇願している、もうじき江戸から「外国奉行」の一人がやって来ることが予想される、と伝えた。これに関連してリハチヨフはゴシケーヴィイチに、今すぐにも箱館奉行を迎えに遣り、ロシア艦艇を呼び戻すべく、ただちにクリッパー艦アプレク号を派遣する旨言明するよう提案した。九月一〇(二二)日ロシア領事館に奉行・淡路守がやって来たが、リハチヨフの提案にことのほか喜んだ。奉行はアプレク号で役人を二名派遣したいと要請し、リハチヨフはそれに同意した。この日の日記の中でリハチヨフは次のように記している。

「…当地では対馬事件について知らないような者は誰一人いないばかりか、巷ではこの話で持ちきりである…このような状況の中では他にどのような解決策があるというのか？」<sup>(80)</sup>

一八六一年九月一一(二三)日、リハチヨフは、ホープ提督に返書を書く。同日、クリッパー艦アプレク号は、クリッパー艦オプリチニク号艦長セリヴァノフに対する、対馬を放棄し、上海に向かう旨の命令書を乗せ、対馬島に向け出港した。<sup>(82)</sup>

一八六一年九月一二(二四)日、箱館奉行はリハチヨフに、日本人はイギリス人に帝国のすべての海岸の測量・海図作成を許可したこと、その際イギリス艦艇に数名の日本人が派遣されるであろうことを伝えた。<sup>(84)</sup>リハチヨフは、それに対し、イギリス人が行うであろうと同じことがロシア人には許可されないということには同意できないと返答した。様々な言い訳をした後、奉行【村垣】淡路守は、この問題に関して江戸に書簡を認めると約束した。<sup>(85)</sup>

九月一五(二七)日、リハチヨフは、ボサドニク号で箱館に到着した。ビリリヨフと対馬案件を協議した。<sup>(86)</sup>同日アプレク号は対馬島に到着した。対馬を離れオプリチニク号で上海に向かうようにとのリハチヨフの命令は、セリヴァノフにとっておよそ思いもかけないものであった。

九月一六日、セリヴァノフは日本人たちと精算を行った。長崎副奉行ナカダイ【中台信太郎、長崎奉行支配組頭】は、芋崎に残されているすべての備蓄品と建物は日本人によってそのまま保存されるであろうことを確約した。家老・仁位孫一郎は中台の命令により、その件についての確約書をセリヴァノフに送って寄越した。セリヴァノフはリハチヨフにこの確約書、および、ビリリヨフが長崎から取り寄せ、クリッパー艦アプレク号上で支払いを済ませた様々な備蓄品と石炭を「引き渡し要求」があるまで対馬に保全しておくという中台の保証書をリハチヨフに発送した。それ以外に、島に残されているクリッパー艦アプレク号の乗組員、家の見取り図やフランス語で書かれた日本についての本も含まれていた。ビリリヨフの持ち物、さらに、家畜たちも箱館に移送された。

九月一七日、オプリチニク号は上海へ、アプレク号は箱館へそれぞれ出航し、アプレク号は二日に箱館に到着した。

ビリリヨフに宛てた私的書簡の中で、セリヴァノフは次のように伝えている。

「…私は当地の日本人たちと別れの挨拶をしました。ここでそう書いたのは、故国の人々とは、別れの挨拶なるものは、かつて、おそらくしたことがなかったからです。日本人たちが見せた態度は、うそ偽りだったのか、あるいは偽りのない友情の気持だったのか、いずれにせよ、一見して見たところ、我々との別離を惜しむ気持には偽りのないものだったことは、間違いないようでした。個人的には私は彼らが実に大好きです。」<sup>(87)</sup>

一八六一年九月二二日、奉行淡路守はI・A・ゴシケーヴィイチのところに対馬島のロシアの建築物を日本政府に引き渡すか、さもなければ、贈与して欲しくないかと頼みにやってきた。長い交渉の末、リハチヨフとゴシケーヴィイチは、ロシア海軍軍人が必要な場合は返却するとの条件付

で引き渡す【傍線はリハチヨフ日記のママ。原典では下線。】ことに同意した。<sup>(88)</sup>

九月二十七日（一〇月九日）、ゴシケーヴィチのところに、副奉行コヴァジ【河津三郎太郎（祐邦）、箱館奉行支配組頭】が、対馬にロシア艦が逗留していることに對し抗議する文書が江戸から届いたとの知らせを持ってやってきた。<sup>(89)</sup>

一八六一年一〇月二二（二四）日、海軍提督リハチヨフは、箱館に逗留していた自分の艦隊のすべての艦艇を巡見し、別れを告げ、翌日蒸気船アデン（Aden）号でロシアに向けて出発した。<sup>(90)</sup>

二月六日、彼は、ヨーロッパからベルブルグに帰る途中のコンスタンチン・ニコラエヴィチ大公と出会った。彼らは帰途を共にし、長い間お互いに話を交わした。<sup>(91)</sup>

二月一〇日、ベルブルグで、大公はリハチヨフと、そしてその後では、外務省アジア局長N・P・イグナチエフ（前駐中国公使）と対馬事案について話した。<sup>(92)</sup> この間、リハチヨフは回答書を作成し、それは海軍元帥【コンスタンチン・ニコラエヴィチ大公】に提出された。その中で彼は、対馬島におけるロシアの立場強化のために為されたすべてを手短かに述べ、ピリリヨフの寄与を高く評価した。結論として最後に、リハチヨフは、次のように述べている。

「我々と日本人たちとの関係は、かつてないほど、友好的かつ誠意のあるものでありました【太字と傍線は筆者ヴァレンチン・スミルノフ】。コルベット艦ボサドニク号の対馬からの退去は、心からの友情と哀惜を伴ったものでした。しかしながら、友情と誠意に充ちたこの関係は、もちろん、何ら直接的な利害と効用を我々にもたらすものではありません。日本において、真に我が国益を体现するものを持たなくなった我々は、近い将来、我々の国民的愛国心にとり、遙かに耐え難い侮辱に

遭遇する可能性があり、究極的手段に訴えることに踏み切らなければ、必ずや、その屈辱を従順に耐えることになるでしょう。

「もし大君の府【Imop Tarkynna】の元に公使が派遣され、我が国の政府が日本と条約を結んでいるすべてのヨーロッパ大国と同等の立場を持つことになれば、対馬問題は、何らの希望もなく抛擲され、埋没してしまふでありましょう。そうなると対馬問題は、単に、数多くの問題の一つになつてしまふことでしょう。それは、我が国と日本という隣り合う大国の間で避けることのできない問題、しかもその好ましい解決方法は、多くの場合、好都合な時期を選択することが決定打となるような、そのような問題のひとつになつてしまふでしょう……」<sup>(93)</sup>

一八六一年二月一五（日）リハチヨフの回答書はイグナチエフに渡された。イグナチエフはそれを元に、アムール委員会の会議提出するための覚え書を作成した。<sup>(94)</sup> 数日後リハチヨフは皇帝に召喚される。アレクサンドル二世は、はっきりと答えよと命じ、次のように下問した。対馬問題の重要性は、「この問題により、イギリスと争い、断絶に至る危険を犯すほど、場合によっては、戦争にまでいたるほど、重大なものか」と。リハチヨフは否定した。<sup>(95)</sup>

二月二二日、大公コンスタンチン・ニコラエヴィチの元で、イグナチエフ、リハチヨフ、および海軍少将A・A・ポポフが同席し、日本事案に関する「予備会議」が行われた。翌日皇帝アレクサンドル二世臨席の元に、リハチヨフとポポフを呼びアムール委員会の会議が行われた。対馬問題を討議した際、コンスタンチン・ニコラエヴィチ大公と外務大臣A・B・ゴルチャコフとの間に「激論」が繰り広げられた。アレクサンドル二世は、「成功裡に始められたこの事案は、今後状況が許した時に利用し発展させるために、捨て置くべきでない」と決裁し、自分の弟（大公）の側に立った。大公はさらに、江戸へのロシア代表部について

の問題も提起し、この件でもゴルチャコフと激論を闘わした。皇帝は大公に腹案を提出しよう命じた。その後でコンスタンチン・ニコラエヴィチは候補者として海軍大佐S・S・レソフスキーを推挙した。<sup>(96)</sup>しかしながらこの派遣は為されなかった。

一八六二年一月、リハチヨフは、一八六一年一〇月二二(一〇)日付けの芝罘発のホープ提督の書簡を受け取ったが、そこには、コルベツト艦ボサドニク号の任務変更に対し満足の意が表明され、対馬での彼がどう行動するか<sup>(97)</sup>の判断は「日本政府の完全なる同意」を得て行われた旨、知らせてきた。

極東に派遣されたロシア艦隊司令長官、海軍少将A・A・ポポフは、一八六二年五月六日クリツパー艦アブレク号から、海軍元帥コンスタンチン・ニコラエヴィチ大公に次のように報告している。

「箱館に向かう途中で私は対馬島に立ち寄りしましたが、侍従武官ピリュレフ【ママ】氏によって建てられた建物はすべて、日本人により取り壊されていたばかりではなく、兵舎の横の石畳の道や風呂のあった場所の幾らかの石を除いて、その形跡さえありませんでした。村では、我々と関係を持つことは固く禁じられていると、我々に何も売ろうとはしませんでした。また、コルベツト艦ボサドニク号がここに滞在していた時にいた役人たちは全員府中に去ってしまったとのこと<sup>(98)</sup>です。」

ロシア海軍軍人たちの対馬島における仕事の直接の成果は、一八六二年、海軍省水路局で発行された同島の地図である。<sup>(99)</sup>

同年、対馬を最後に離れたクリツパー艦オプリチニク号が行方不明となっていることが分かった。一八六一年一〇月三一日オプリチニク号は上海からクロンシュタットに向けて出発し、經由地のバタビヤ(現ジャカルタ)を二月一〇日に後にしている。海軍省の公式見解によれば、乗組員九五名を乗せたクリツパー艦は、おそらくスンダ海峽から喜望峯

岬に向かう途中で暴風雨の中心に遭遇し沈没した。オプリチニク号の沈没については、例えば爆発によるという別の見方もある。<sup>(100)</sup> そうだったのかも知れない。しかし、どういうわけか、誰もクリツパー艦オプリチニク号の沈没を同艦が「対馬事件」に参加したことと結びつける者はいなかった。

さて、対馬島でロシア海軍軍人が行動した時代からほとんど四半世紀が経った。朝鮮半島で政治状況が尖鋭化したとき、海軍中将リハチヨフは一八八四年二月一日、ロシア海軍の新しい指揮官である海軍元帥アレクセイ・アレクサンドロヴィチ大公【皇帝アレクサンドル二世の四男、皇帝アレクサンドル三世の弟、同ニコライ二世の叔父】に宛てて、極東におけるロシア海軍力の状況についての覚え書を下準備した。その中で彼はとりわけ次のように指摘している。「…海軍の観点から言えば、ウラジオストクは強力な足場という位置づけのみに限定し、「日本」海から自由に外洋に出て行けることが必要であろう。それなくしては、ウラジオストクを強力な足場と見なすことは決してできまい<sup>(101)</sup>」。覚え書の中でリハチヨフは一八六一年の対馬での出来事を引き合いに出している。この他に、リハチヨフは上記の問題についてアレクサンドル三世宛ての書簡を準備したが、それはおそらく提出されなかったようである。<sup>(102)</sup>

一八九一年にリハチヨフは、退役海軍軍人で評論家のA・E・コンケヴィチ(ペロモール)の要請に応じて、一八六一年の対馬におけるロシア海軍軍人の活動の史的記録をまとめたが、Aコンケヴィチは自著『対馬エピソード』の中で、リハチヨフがまとめたものを利用した。<sup>(103)</sup>

日露戦争(一九〇四—一九〇五)が始まって数か月後、ロシアの勝利を疑っていなくなったリハチヨフは、皇帝ニコライ二世宛に、太平洋における優勢的地位強化の必要性に関する書簡を準備した。その中で彼はとりわけ次のことを指摘している。「世界の最も素晴らしい港の一つを持

つ対馬島は、…地中海におけるマルタ島と同じく、第一級の戦略地点の一つと見なすことが出来ます。しかしながら、対馬島の方が、すべての点において、マルタ島より優れています。もしロシアが戦争終結と同時に、この島を確保するならば、我々は日本を大陸から切り離し、今後における日本の軍事的意図を不可能なものとする事ができます。それと同時に、太平洋のこの海域における優勢的地位を成すことになるでありましょう。そのためには、海軍力において隣接諸国を圧倒することが条件になることは言うまでもありません…<sup>(註)</sup>」

それからちょうど一年後、Z・P・ロジエストヴェンスキーの指揮下の太平洋艦隊第二分艦隊【バルチック艦隊のこと】は、まさに対馬近海で粉砕された。一方、日露戦争の失敗は、一九〇五—一九〇七年の第一ロシア革命の重要な原因のひとつになる。

(翻訳：有泉和子)

【】は訳注。

〔註〕

- (1) *Sobolev V.S. На подпарных морях и на южных... Записки историка-архивиста. СПб, 2007. С. 55.*
- (2) イヴァン・フョードロヴィチ・リハチョフ(一八二六—一九〇七)、海軍中將(一八七四)。太平洋の探検、クリミア戦争参加(一八五三—一八五六)、コンスタンチン・ニコラエヴィチ大公の直屬(一八五八—一八五九)、ロシアの中国海域艦隊司令長官(一八六〇—一八六一)、駐英仏武官(一八六七—一八八二)。海軍総軍令部創立構想の立案者。【海軍総軍令部(Морской генеральный штаб)は海軍参謀本部(Главный морской штаб)から分かれて海軍省内部に設置された軍令専門組織で一九〇六年設置。リハチョフの提唱は一八八八年。一方、後者は軍政・軍令双方を管轄、設立は一八二七年】

- (3) РГАВМФ. Ф. 16. Оп. 1. Д. 179. Л. 1-2.
- (4) Там же. Д. 2. 06.
- (5) РГАВМФ. Ф. 240. Оп. 1. Д. 1. Д. 14.
- (6) Йошищип・アントノヴィチ・ゴシケーヴィチ(一八一四—一八七五)、初代駐日ロシア領事(一八五八—一八六五)、日本と中国に関する著作、日本語と中国語の特殊性に関する著作の著者。
- (7) РГАВМФ. Ф. 16. Оп. 1. Д. 22. Д. 6, 8.
- (8) РГАВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 2385. Д. 2-2. 06.
- (9) Там же. Д. 3-3. 06.
- (10) Там же. Д. 3. 06-4.
- (11) 聖ウラジーミル湾はロシア沿海州南東部にある湾。
- (12) РГАВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 2385. Д. 4. 06-5.
- (13) Там же. Д. 5. 06.
- (14) Там же.
- (15) Там же. Д. 5. 06-6.
- (16) Там же. Д. 7-8.
- (17) РГАВМФ. Ф. 16. Оп. 1. Д. 22. Д. 259.
- (18) РГАВМФ. Ф. 16. Оп. 1. Д. 22. Д. 110-111.
- (19) Там же. Д. 115.
- (20) Бирлиョフ・ニコライ・アレクサンドロヴィチ(一八二九—一八八二)は、海軍少將(一八七二)、クリミア戦争の英雄(一八五四—一八五六)、コルベット艦ボサドニク号艦長(一八五九—一八六三)。
- (21) РГАВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 2385. Д. 9-10.
- (22) РГАВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 2385. Д. 15-15. 06.
- (23) Там же. Д. 27-27. 06.
- (24) Там же. Д. 28-30. 06.
- (25) Белогор А. Ту-Симский эпизод // Русский вестник. 1897. No. 5. С. 62.
- (26) РГАВМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 2385. Д. 16.
- (27) Там же. Д. 18, 21-22, 49, 53.
- (28) Там же. Д. 31.

- (29) ПЛБМФ. Ф. 16. Оп. 1 Д. 22. Л. 155-157.
- (30) ПЛБМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 2385. Л. 33.
- (31) Там же. Л. 34-35 о6.
- (32) Бенюор А. Тей-Смекский эпизод // Русский вестник. 1897. No. 5. С. 63.
- (33) ПЛБМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 2385. Л. 38-38 о6.
- (34) ПЛБМФ. Ф. 16. Оп. 1 Д. 22. Л. 167, 168.
- (35) Бенюор А. Тей-Смекский эпизод // Русский вестник. 1897. No. 5. С. 75.
- (36) Там же. С. 76.
- (37) Там же. С. 77.
- (38) ПЛБМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 2385. Л. 39.
- (39) Там же. Л. 40-40 о6.
- (40) Гелкен, Фюрдоль-Алекса́ндрович (一八三五一—一九〇六) 海軍大将(一九〇四)。セヴァストポリ防衛戦に参加、(一八五四—一八五五)。一八五九—一八六二年、太平洋ではコルベツト艦ポサドニク号乗艦。対馬島の海図作成に参加。
- (41) ПЛБМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 2385. Л. 46 о6.
- (42) Там же. Л. 54.
- (43) Там же. Л. 23.
- (44) Там же. Л. 23 о6.
- (45) Оолрокк (Rutherford Alcock; 一八〇九—一八九七) とは、イギリスの医師で外交官。【一八四〇】—一八五〇年代【四四年駐厦門】、駐福州領事、後に駐上海領事【四六年】、駐広東領事【五五年】。一八五八年から駐箱館領事、一八五九年駐日英国公使。一八六一年江戸の公使館【東禅寺】で襲撃さる。一八六五—一八七一年北京公使、全権公使。一八七六年からロンドン地理学協会会長。日本に関する著作は以下の通り。《Elements of Japanese grammar》(1861); 《The capital of the Tycoon: a narrative of a three years' residence in Japan》(2 冊, 1863); 《Familiar dialogues in Japanese with English and French translations》(1863); 《Art and art industries in Japan》(1878).
- (46) ПЛБМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 2385. Л. 60-62.
- (47) ПЛБМФ. Ф. 16. Оп. 1 Д. 22. Л. 190.
- (48) ПЛБМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 2385. Л. 55-55 о6., 58-58 о6.
- (49) Там же. Л. 56 о6.-57.
- (50) Там же. Л. 54-54 о6.
- (51) 小栗(小栗上野介(忠順)、一八二七—一八六八)とは、日本の国政を担った人物。一八五九年よりの豊後守を名乗る。一八六〇年の日本の渡米使節を率いる【実際は目付】。横須賀の造船所建設(一八六五—一八七一)を指揮する。明治政府軍により斬首。
- (52) ПЛБМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 2385. Л. 63-63 о6.
- (53) Там же. Л. 64-66.
- (54) Там же. Л. 67-67 о6.
- (55) Там же. Л. 63.
- (56) Там же. Л. 69 о6.-70.
- (57) Там же. Л. 73 о6.
- (58) ПЛБМФ. Ф. 16. Оп. 1 Д. 22. Л. 206.
- (59) ПЛБМФ. Ф. 410. Оп. 2. Д. 2385. Л. 85.
- (60) Там же. Л. 80-80 о6.
- (61) Там же. Л. 82-82 о6.
- (62) Там же. Л. 82 о6.
- (63) Там же.
- (64) Там же. Л. 83-83 о6.
- (65) 既に一八六一年四月一七日皇帝アレクサンドル二世は軍人たちの昇進と叙勲に関する海軍省のパスハ命令を承認した。このため、I・F・リハチヨフも海軍少将になった。
- (66) ПЛБМФ. Ф. 16. Оп. 1 Д. 22. Л. 235, 236.
- (67) ジェームス・ホープ (James Hope, 一八〇八—一八八一) 英国海軍軍人、海軍大将(一八七九) 一八五九—一八六三年は太平洋【東インド中国】艦隊を指揮している。
- (68) ローレンス・オリファント (Laurence Oliphant, 一八二九—一八八八) とは、英国の冒険家、旅行家、外交官、作家。多くの著作があるが、そ

の中に『ロシアの黒海沿岸、ヴォルガ下りとドン・コサックの地方を巡った旅 一八五三年秋』【«Черноморское побережье России осенью 1852 года, путешествие вниз по Волге и по стране донских казаков»】(一八五三)もある。クリミア戦争時(一八五三—一八五六)オマール・パシヤの幕営付となる。在江戸イギリス公使館の書記官であった一八六一年、負傷。パレスチナへのユダヤ人移住案の作成者(一八七八)。

- (69) РГВМФ. ф. 410. Оп. 2. Д. 2385. Л. 88-89.
- (70) Там же. Л. 90-91.
- (71) *Бетюпор А.* Ту-Симский эпизод // Русский вестник. Т. 249. 1897. С. 68-70.
- (72) РГВМФ. ф. 410. Оп. 2. Д. 2385. Л. 94-97.
- (73) РГВМФ. ф. 16. Оп. 1. Д. 194. Л. 4 о6. -5.
- (74) *Бетюпор А.* Ту-Симский эпизод // Русский вестник. 1897. No. 5. С. 71.
- (75) РГВМФ. ф. 16. Оп. 1. Д. 22. Л. 259.
- (76) 一八五六—一八六〇年、英仏は清国と戦争(第二次アヘン戦争)をした。
- (77) РГВМФ. ф. 16. Оп. 1. Д. 22. Л. 260.
- (78) Там же.
- (79) Там же. Л. 263.
- (80) Там же. Л. 263 о6.-264.
- (81) Там же. Л. 264.
- (82) РГВМФ. ф. 410. Оп. 2. Д. 2385. Л. 132.
- (83) コルベット艦ボサトニク号に乗艦したN・A・ピリリョフが対馬を去り箱館に向かったのは一八六一年九月七日である。
- (84) I・F・リハチョフはこの件に関し、既に一八六一年二月と三月にI・A・ゴシケーヴィチに頼んでいる。だが、ゴシケーヴィチは江戸に行っていたにもかかわらず、この依頼を果たすことはなかった。
- (85) РГВМФ. ф. 16. Оп. 1. Д. 22. Л. 264. 265.
- (86) РГВМФ. ф. 16. Оп. 1. Д. 194. Л. 4.
- (87) РГВМФ. ф. 410. Оп. 2. Д. 2385. Л. 131 о6.-133.
- (88) РГВМФ. ф. 16. Оп. 1. Д. 22. Л. 267. 268.
- (89) 一八六一年十二月、I・F・リハチョフはコンスタンチン・ニコラエ

ヴィチ大公に宛てた自己の覚え書の中で、この行為は「イギリス人の要求により強いられた」(РГВМФ. ф. 16. Оп. 1. Д. 194. Л. 5)。

- (90) РГВМФ. ф. 16. Оп. 1. Д. 22. Л. 268.
- (91) Переписка Императора Александра II с Великим Князем Константином Николаевичем. Дневник Великого Князя Константина Николаевича. 1857-1861. М.: «ТЕРРА» - «ТЕРРА», 1994. С. 349.
- (92) Там же. С. 350.
- (93) РГВМФ. ф. 16. Оп. 1. Д. 194. Л. 5-5 о6.
- (94) Там же. Л. 1.
- (95) *Бетюпор А.* Ту-Симский эпизод // Русский вестник. 1897. No. 5. С. 73.
- (96) Переписка Императора Александра II с Великим Князем Константином Николаевичем. . . . С. 352.
- (97) РГВМФ. ф. 410. Оп. 2. Д. 2385. Л. 135-136.
- (98) РГВМФ. ф. 410. Оп. 2. Д. 2452. Л. 175.
- (99) РГВМФ. ф. 1331. Оп. 1. Д. 454.
- (100) О книгере «Опричник» // МСБ. Т. LXVI. No. 6. Июнь. 1863. Смесь. С. 44-50.
- (101) РГВМФ. ф. 16. Оп. 1. Д. 229. Л. 3 о6.
- (102) Там же. Л. 1-1 о6.
- (103) РГВМФ. ф. 16. Оп. 1. Д. 244. л. 4. 7の草稿は筆跡が判りにく。
- (104) *Бетюпор А.* Ту-Симский эпизод // Русский вестник. 1897. No. 4. С. 230-250; No. 5. С. 50-86.
- (105) РГВМФ. ф. 16. Оп. 1. Д. 251. Л. 44 о6.